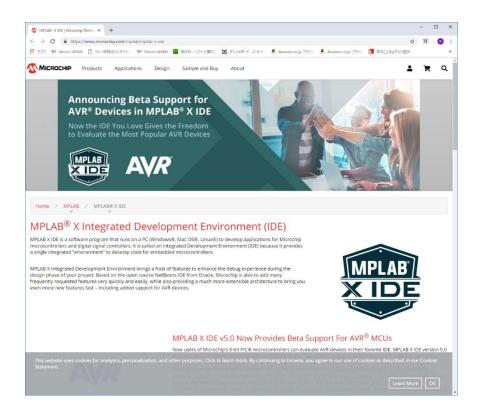
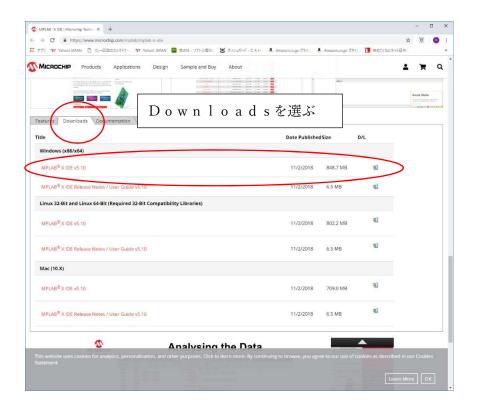
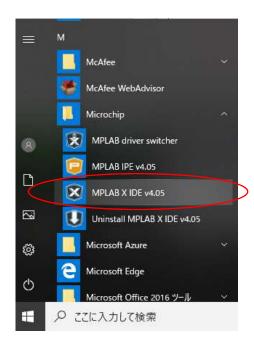
1. MPLABX をダウンロードする。「https://www.microchip.com/mplab/mplab-x-ide」





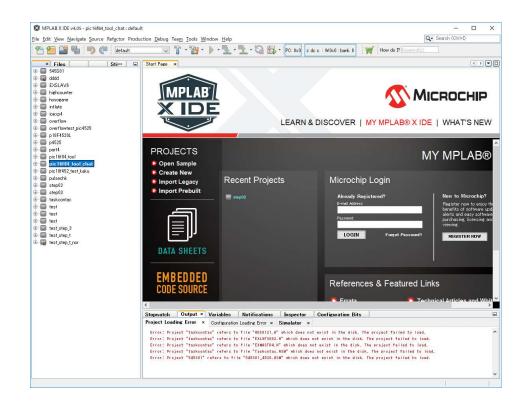
2. インストール後の「MPLAB X IDE」を起動する。



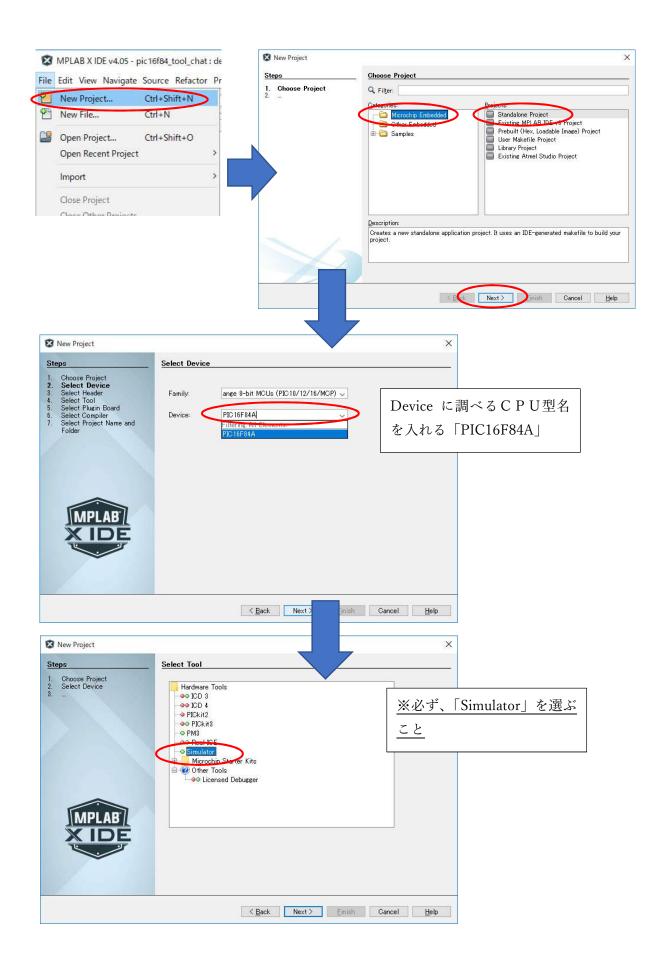
MPLAB IPE HEX ファイルを PICKIT などを使用し てプログラムを書き込むソフトウェア

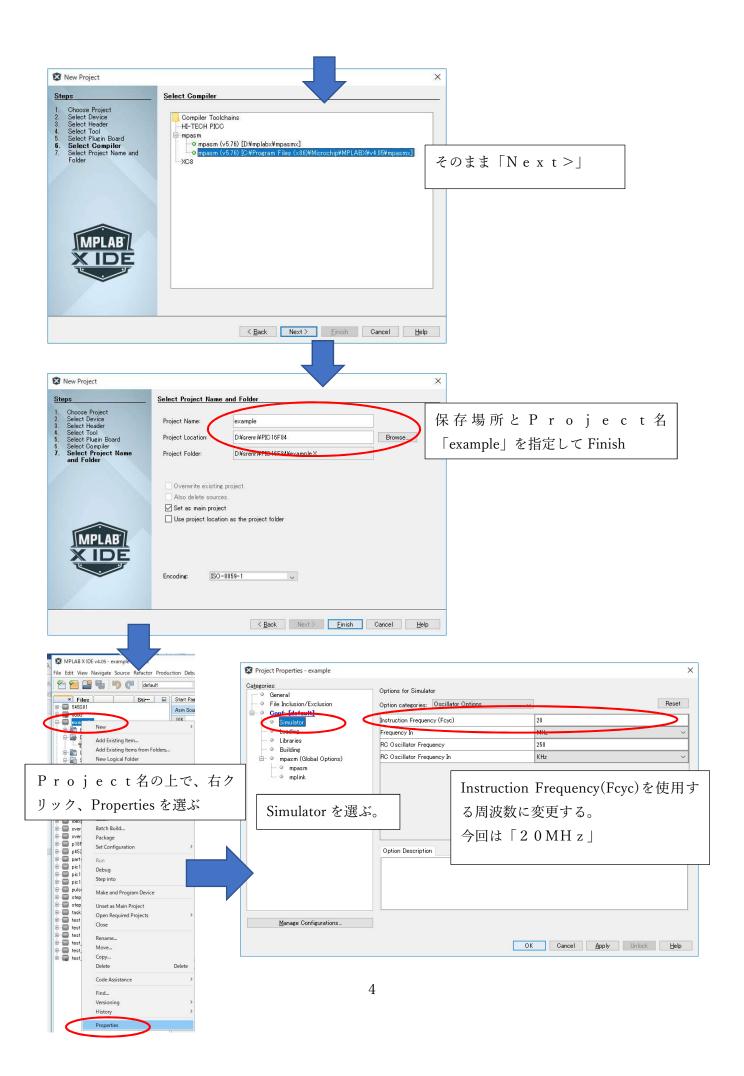
インストールされた Microchipのソフトウェア。「MPLAB X IDE v4.05」が今回使用する開発環境

3. 起動した「MPLAB X IDE」の開発画面



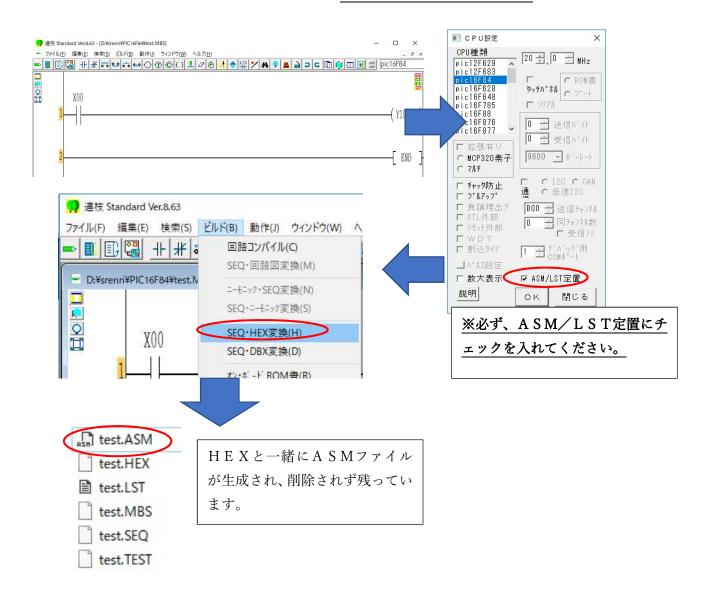
4. 「File-New Project」から新規のプロジェクトを作成する。



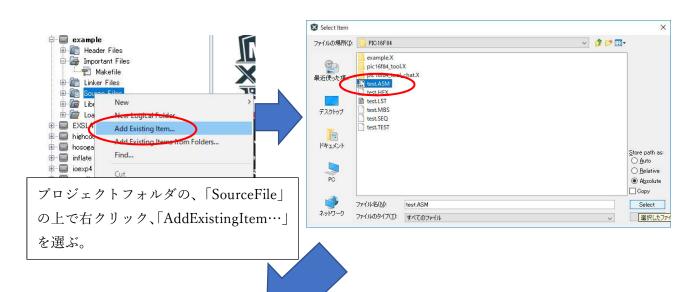


5. スキャンタイムを計測したいラダーのASMファイルを生成する。

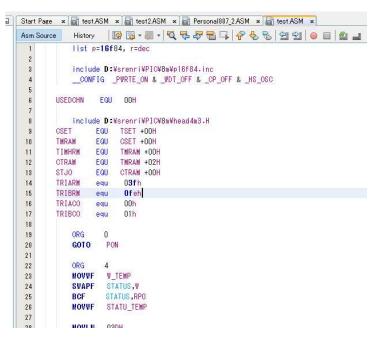
連枝で製作しているラダーのHEXファイル・ASMファイルを生成します。ラダーを作成し、CPU設定において、CPU種類を当該CPUの型番、ASM/LST定置にチェックを入れます。



6. 作成したASMファイルをプロジェクトに追加します。



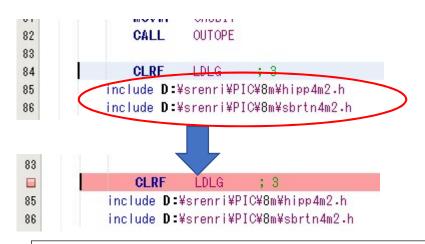
MPLAB X IDE v4.05 - example : defaul File Edit View Navigate Source Refactor Produdefault × Files Sti---⊕ ■ 545S01 ⊕ Gddd example === Header Files important Files inker Files test.ASM i Libraries 追加されたファイルをダブルクリック するとプログラムの中身が表示される。



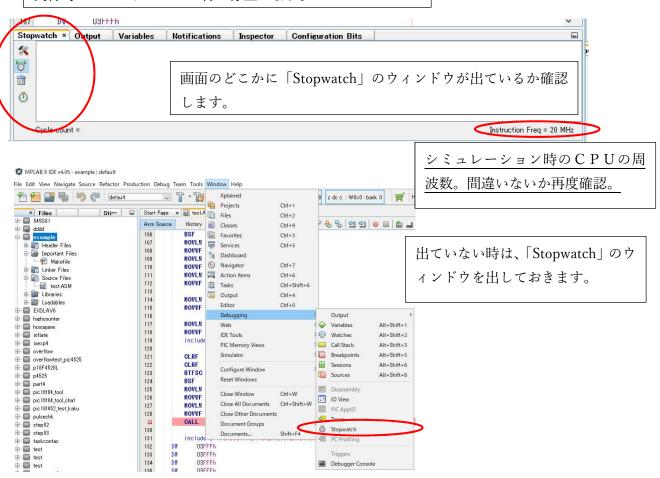
7. プログラムの後半を探す。

CPUのプログラムにより、後ろの場所は違いますが、目安として、ヘッダファイルがいくつか「include」 されている部分の手前が自ら作成したラダーの最終行となります。

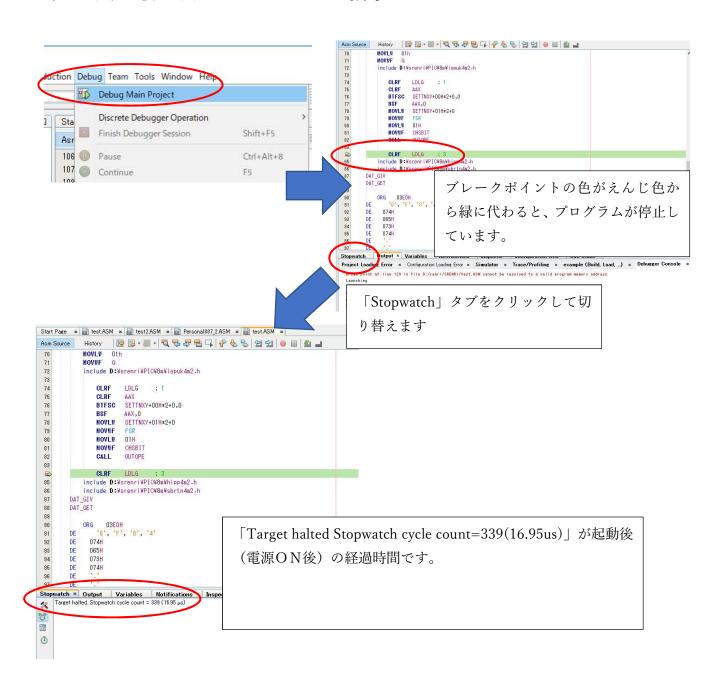
この部分にプログラムを停止させる、「ブレークポイント」を設定します。



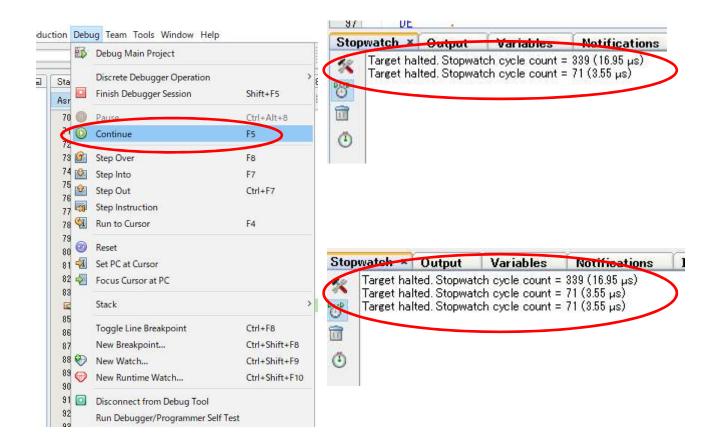
行番号をクリックすると、ブレークポイントの設定完了。 実行時にプログラムがこの行で停止します。



8. プログラムをデバッグでシミュレーションします。



プログラムを継続実行し、経過時間を確認する。



以上により、今回のラダーはスキャンタイム 3.55 μ s といえます。ただし、以下の点については、より深く使用方法を習得する必要がありますので、ご注意ください。

スキャンタイムは、プログラムの命令の実行不実行で変わります。

ハードウェアのアクセスする、また、ハードウェアからの応答を待つようなプログラムの場合大きく時間が伸びます。特に、EEPROMなどのアクセスは、スキャンタイムが伸びます。ただし、シミュレーション上は、単純にEEPROMの解析はできませんのでご注意ください。

9. チャッタ防止を設定したときのスキャンタイム。

